

第8章 米倉二郎と京都帝国大学

—歴史地理学者としての出発点—

I. はじめに

米倉二郎（第15図）は、昭和初期から平成にかけて活躍した地理学者である。その専門領域は広く、歴史地理学をはじめ集落地理学、政治地理学、中国研究やインド研究などがあげられるが、なかでも歴史地理学はその研究活動の中核の一つであった。初期の論考「農村計画としての條里制」¹⁾や「律令時代初期の村落」²⁾は、歴史地理学史上、特に条里研究史上、画期的な意義を持つ研究とされる³⁾。学位論文となった昭和35（1960）年刊の『東亜の集落』は、自身の条里集落に関する歴史地理研究の集大成ともいうべき存在であった⁴⁾。

このように歴史地理学が米倉の研究の中核となったのは、米倉が研究者としての出発点において、京都帝国大学文学部史学科の地理学教室に身を置いていたことに起因するといっても過言ではない。京都帝国大学地理学教室は歴史地理学を伝統の一つとする学風があったが、これは初代教授の小川琢治、助教授の石橋五郎がいずれも歴史性を重視した地理学研究を進めていたことによる⁵⁾。加えて地理学教室が史学科に設置されたことも少なからず作用していると思われる。このような環境の中で、米倉は歴史地理学者としてのスタートを切ったのである。

いうまでもなく米倉は、近現代日本の歴史地理学を語る上で欠かせない人物である。この米倉について考察を加えることは、歴史地理学史の全体像を明らかにする上で必要不可欠の営みであり、とりわけ歴史地理学者の出発点となった京都帝国大学時代の米倉について知ることは重要であると思われる。米倉に関するまとまった研究は岡田俊裕によってなされているが、京都帝国大学での教育や学問的影響については必ずしも十分には論じられていないことから⁶⁾、本章では特に大学在学中及び助手時代という初期の時代⁷⁾を対象に、米倉の足跡をたどることとしたい。



象
業会編
、出』、

Ⅱ．京都帝国大学での教育

米倉二郎は明治 42（1909）年に佐賀県三養基郡に生まれた。大正 9（1920）年に入学した地元の三養基中学校では、京都帝国大学地理学教室卒業の伏見義夫に学んでいる。同校では教官は一切教科書を使わず、自ら資料を作成して授業を行っており、伏見も独創的な授業を行っていた。時にはフィールドワークも実践して地図作成も課したといい、米倉に強い印象を与えたようである⁸⁾。卒業後には佐賀高等学校に入学し理科甲類で学んだが、「物理・化学の実験が苦手」⁹⁾であったことから、昭和 3（1928）年に入学した京都帝国大学では理科に進まず、文学部史学科で人文地理学を専攻することとなったという¹⁰⁾。

米倉が入学した京都帝国大学の地理学教室は、明治 40（1907）年に史学科の史学地理学第二講座として創設され、初代教授を小川琢治が、初代助教授を石橋五郎が務めていた。米倉の入学当時、初代教授の小川琢治は理学部地質学教室に転じていたが、引き続き文学部史学科で自然地理学概説などの授業を担当していた。また初代助教授の石橋五郎は大正 8（1919）年に教授に昇任しており、小川の門下生である先史地理学者・小牧実繁が昭和 5 年に欧州留学から帰国し、助教授として講義を行っていた。また同年から小野鉄二が講師として地図学を教えていた。

また、史学科では地理学専攻でも国史学や西洋史学、東洋史学、考古学など他講座関連の講義は必修であり、地理の学生も隣接諸分野の素養を身につける機会に恵まれていた¹¹⁾。米倉も地理学以外の諸教官からも教えを受けたようで、昭和 35（1960）年発行の『東亜の集落』の序文において、以下のように述べている。

顧みれば昭和三年京大文学部に入学以来、地理学科の石橋五郎、小川琢治の両先生をはじめ、三浦周行、喜田貞吉、浜田耕作、桑原隲蔵、矢野仁一、羽田亨、那波利貞、西田直二郎、中村直勝、時野谷常三郎、原随円（ママ）諸先生の講筵に列することをえ、地理学教室在任中はさらに、小牧実繁、小野鉄二、藤田元春、梅原末治、宮崎市定諸先生の御指導を忝うした。¹²⁾

このうち三浦、喜田、西田、中村が国史学講座、桑原、矢野、羽田、那波、宮崎が東洋史学講座、時野谷、原が史学地理学講座（西洋史学）、浜田、梅原が考古学講座に関係する教官であった。地理学専攻の学生がこれほどまでに多彩な史学関連講義を受講できたことは、理学部におかれた東京帝国大学の地理学教室にはない特徴であった。京都帝国大学の地理学教室出身者で歴史地理学者が多いのは、ごく自然な結果であったということもできよう。これらの史学関連諸教官のうち、特に喜田貞吉の日本歴史地理の講義には興味をそそられたようで、後年懐かしそうにその講義を回顧している。この点については後述する。

米倉は昭和 6（1931）年に卒業論文「筑後川下流平野の開発—特に其溝渠を中心としての考察—」¹³⁾を提出して地理学教室を卒業した¹⁴⁾。この論文について、当初は「日頃見馴れている所は学問的に書くことは難しいので、沖縄をテーマに

しよう」と考えたというが、小川から「いつ卒業するつもりなのか、2～3年では書けない」と言われ、結果的に佐賀平野の開発をテーマにすることにしたという¹⁵⁾。

卒業後は、卒業論文執筆の際にいろいろ助言を受けた農学部教授の古賀正巳に誘われて農学部教務嘱託として勤務した¹⁶⁾。この教務嘱託時代、米倉は古賀の耕地整理に関する講義を受講しているが、当時の深刻な農村不況の根本的な打開策として農村計画を位置付ける古賀の発想¹⁷⁾は、その後の米倉の条里制研究に影響を与えることとなった。

昭和7年には、地理学教室の助手に就任した。前任の村松繁樹が学習院大学に赴任することとなり、石橋より助手の任命を受けたという。昭和12年に和歌山高等商業学校に転出するまでの5年間、石橋と小牧の下で助手を務めた。

米倉はこの助手時代に重要な論考をいくつかのものしている。冒頭で述べたように、昭和7年に刊行された教室機関誌『地理論叢』の第1輯には「農村計画としての條里制」を發表し、翌8年には同誌第2輯に「律令時代初期の村落」を、雑誌『歴史と地理』に「条里より見たる大津京」を發表した。昭和10年には雑誌『考古学』に「近江国府の位置について」を、同11年には雑誌『歴史地理』に「中世に至る若狭小浜平野の歴史地理」などを執筆している。特に「農村計画としての條里制」と「律令時代初期の村落」の2論文については、いずれも古代条里制に基づく村落景観の復原を目指したもので、金田が「村落景観に関する代表的な見解として、地理学のみならず歴史学に対しても大きな影響を与え続けた」と評するなど¹⁸⁾、重要な意義を有する論文であった。とりわけ条里制を「今日云はれる処の農村計画の一型式であった」¹⁹⁾と位置付けたことは画期的であった。

次節においては、米倉が京都帝国大学史学科で様々な教官からどのような影響を受け、独自の歴史地理学を形成していったかについて検討することとしたい。

Ⅲ. 諸教官との接点とその影響

前述のように、米倉が京都帝国大学で教えを受けたのは多数に上るが、米倉自身、その講義の内容や学問的影響について一定程度言及しているのは数人である。いうまでもなく地理学教室の関係者である小川琢治、石橋五郎、小牧実繁、そして国史学講座の関係者であった喜田貞吉である。以下において、これらの教官の講義や学問上の影響について、米倉がどのように述べているかについて言及したい。

(1) 小川琢治

小川琢治は明治29(1896)年に帝国大学理科大学(現、東京大学理学部)地質科を卒業し、農商務省地質調査所の技師として勤務し、「日本群島地質構造論」を世に問うなど、まず地質学の分野で活躍した研究者である。明治41(1908)年5月に京都帝国大学史学科地理学教室の初代教授として来任した。小川の担当授業は自然地理学や地形学が中心であったが、一方で漢籍に関する深い造詣を有し、中国歴史地理に関する多くの論考を生み出すとともに、砺波平野の散村や奈良盆

地の環濠集落に着目し，その歴史地理学的，集落地理学的研究に取り組んだ²⁰⁾。大正10(1921)年に理学部の鉱物学教室教授に転じたが，引き続き史学科で講義を担当していた。

米倉が大学に入学した昭和3年当時，小川は理学部教授であったが，前述のとおり史学科で講義を担当していた。米倉が入学した年の担当科目は普通講義が「自然地理学概説」，特殊講義が「気候学及び生物地理学」「地学史」²¹⁾であった(第12表)。小川は米倉の入学2年目の昭和5年に定年退官することから，まさに小川の最後期の受講生にあたる。米倉は後年小川の講義を回想して「難解をもって聞えた小川琢治先生の自然地理学講義も文科出身の同窓よりもいくらか理解することが容易であった」と述べている²²⁾。小川の講義はよほど難解であったと見えて，米倉は次のようにも回顧している。

原語を交えて，数理地理学から始まった先生の自然地理学概説は，文科出身の学生にはまったくお手あげであった。(略)先生の生物地理学の特殊講義はもっと型破りのものであった。ノートはもたれず，英・仏・独の数冊の原書を携行されて，その中からあちらこちらと拾い読みをされて講義を進められた。(略)しかしわれわれ低能児にはその間の脈絡をつける能力はほとんどなく，高根に咲く色とりどりの花を垣間見る思いで聞き流してしまった。²³⁾

このように小川の講義は，文学部では自然地理学、特に地形学を主としており²⁴⁾，専門の一つである歴史地理に触れることはあまりなかったと思われる。米倉が小川から影響を受けたとすれば，むしろ著作や講義以外の接点においてであろう。特に小川の奈良盆地の「垣内式集落」の議論は米倉の研究に大きな影響を与えたと思われるが，これらは講義というよりもむしろ著作や個人的な交流によって示唆を受けた可能性が高い。この「垣内式集落」とは，大和盆地の条里地割の中に見られる環濠集落を小川が命名したもので，米倉はこの集落を計画的に作られた「条里制集落」として敷衍させていくこととなった²⁵⁾。昭和7年発表の「農村計画としての条里制」の末尾には，「本研究は小川，藤田二大先達の驥尾に附して行ひ得た」としており，米倉が条里研究に開眼する契機の一つに小川らの研究があったと思われる。具体的には，小川が昭和3年に刊行した『人文地理学研究』²⁶⁾から示唆を得たことを述べているが²⁷⁾，いずれにせよ米倉が小川の著作を熟読し，そこから研究の着想を得ていたことがうかがえる。また小川は講義の合間に学生を研究室に招いて「講義では聴けない」話をしたり²⁸⁾，自宅に呼んで指導したりしていたという²⁹⁾。米倉もそのような機会に小川から条里研究などについて示唆を受けていた可能性もある。歴史地理学における条里研究史は，事実上米倉から始まるが，その最初の一石はまさしく小川が投じたこととなる。また米倉は，農村計画としての条里制の原型を，古代中国の井田制や均田制に求めているが，このような視点は中国歴史地理研究を得意とした小川の学風の影響ともいえよう³⁰⁾。

第12表 史学科における地理学関連講義(昭和3年度-5年度)

	昭和3年度	昭和4年度	昭和5年度
石橋五郎	人文地理学概説 交通地理学 政治地理演習	人文地理学概説 人種地理 地理学実習 政治地理学の諸問題	人文地理学概説 人口及集落 地理学実習 地誌の研究
小川琢治	自然地理学概説 気候学及び生物地理学 地学史	自然地理学概説 日本及東亜の地誌 地図学	地文学と人文学との関係
中村新太郎	地史学講義	亜米利加誌	自然地理学概説
小牧実繁	-	-	仏蘭西地誌 外国地理書購読
小野鉄二	-	-	地図学
熊谷直一	地図学	-	-
春本篤夫	地理学実習	地理学実習	-
喜田貞吉	国史と地理	国史地理	国史地理
山根新次	地形学	地形学	地形学
金関丈夫	-	人類学	-

資料:(無署名)「京都帝国大学文学部史学科本学年講義題目」史林13-3, 1928, 501頁, 史林14-3, 1929, 457-458頁, 史林15-1, 1930, 168頁。

(2) 石橋五郎

石橋は明治30(1897)年に東京帝国大学文科大学史学科に入学し、当初は西洋史学専攻であったが在学中に地理学に目覚め、大学院では人文地理学を専攻した。明治40年に京都帝国大学文科大学史学科に地理学教室が開設されると、初代助教授として着任した³¹⁾。京都帝国大学で地理学を講ずるにあたり、昼夜兼行ラッツェルの著 *Anthropogeographie* (『人類地理学』第1巻)を精読し、それをもとに講義案を組み立てたという³²⁾。

米倉が入学したのは石橋が大正8(1919)年に教授に昇任した後であった。米倉の入学時、石橋の講義科目は「人文地理学概説」や「交通地理学」「政治地理演習」³³⁾であったが(第12表)、米倉はそれらの講義について以下のように述べている。

大学に於ける石橋先生の講義は主としてラッツェルによつて人文地理学を講述されたのであるが、勿論ラッツェルを完全に解釈咀嚼されて更に支那日本に於ける材料を盛られたもので、その堂々たる体系と興味深き引用とは全学生の等く傾聴した処であった。³⁴⁾

また後年、「ラッツェルを祖述された石橋五郎先生の人文地理学は整然とした体系で興味深く聴講した」とも回顧している。

米倉の研究には、石橋の地理学観である地人相関論³⁵⁾の影響と思われる記述もみられる。昭和7年発表の「農村計画としての條里制」には、「凡、文化景觀一般は、人類が自然への適応乃至自然の征服の結果として現実せるもので、その成

立は所与の自然的条件と、之に作用する人類の技術的労働とによる」³⁶⁾とあり、まさに石橋の地人相関論を意識した記述であると考えられる。また、石橋地理学の特徴は歴史的考察を重視した点にあり、昭和7年の石橋による「我が地理学観」でも「時ありては歴史的説明が地人相関の解釈の大部分を占むるのである」³⁷⁾と述べるなど、歴史的考察を重視した地理学者であった。石橋の影響は小川ほど濃厚ではないが、米倉が歴史地理学研究を進める上で少なからず示唆を与えたのではないかとと思われる。

(3) 小牧実繁

小牧は大正8(1919)年に京都帝国大学に入学し、同11年に卒業、その後大学院で学んだ。専門は先史地理学であり、大正14年には助手に就任、翌年には講師に昇任している。昭和2(1927)年から年にはフランスなどに留学し、帰国後の同4年には教授の石橋五郎の下で助教授となった³⁸⁾。昭和8年9月、小牧は後の歴史地理学の展開に大きな影響を与える岩波講座・地理学『歴史地理学』を著した。この著作は小牧の初の体系的な歴史地理学理論を展開したもので、その後の歴史地理学における基本的な思考となった重要な著作であった³⁹⁾。具体的には歴史地理学の使命を、「歴史時代に於ける或る時の断面に於ける土地地域(景観, Landschaft, landscape, paysage の訳語としての景観)」の復原・再現と位置付けたのである⁴⁰⁾。

この理論を最も早く受け止めたのは、当時地理学教室の助手を務めていた米倉であった⁴¹⁾。米倉はすでに史学科の学生の頃も小牧の講義を聴いているが(第12表)、決定的な影響を受けたのは助手の頃であったと思われる⁴²⁾。その影響を示すのが「律令時代初期の村落」である。その冒頭で米倉は次のように述べている。

地理学に於ける歴史地理学の意義とその研究法に就いては、最近小牧助教授によつて、内外の諸説を批判綜合して平易明快に論述せられた。歴史地理学の純論理的目的は歴史時代の或る時の断面に於ける景観の復原描出にあり、之に到達する手段としては現在の景観を基礎として、景観構成要素の中重要なもの若干に就き、その歴史的発展を究め、後世に於ける景観の変遷を修正還元して問題の時代迄遡る事が最も効果的であると思はれる。⁴³⁾

その上で米倉は、この論考における「時の断面」を「律令時代初期」に設定している。というのも「我国に於ける村落景観は、之(大化改新による班田収授の法一筆者注)によつて整理統一され或は一変するゝ事となつた。従つてそれを究めんとする我々は時を先づ律令時代の初期にとるべきであらう」⁴⁴⁾という理由からであった。米倉はこれ以降も「時の断面」説に基づく歴史地理学研究を進めている。博士論文となった昭和35(1960)年の『東亜の集落』でも、広義の歴史地理学を人文地理学と同義とした上で、「もっとも純粹狭義の歴史地理学は、過去のある時代における地理的現象の研究となるであらう」と述べ、小牧の理論に依拠

している。歴史地理学や条里制研究への開眼の契機となったのは小川の存在が大きいと思われるが、具体的な研究理論や方法論に関しては小牧の歴史地理学を継承したと見るべきであろう⁴⁵⁾。

(4) 喜田貞吉

喜田は歴史学者として知られるが、その真髄は歴史地理学にあった。明治 26 (1893) 年に帝国大学文科大学国史科に入学し、同 29 年に卒業した。卒業と同時に、日本の歴史地理を研究テーマに掲げて大学院に進学した。大学院在学中の明治 32 年 4 月には国史科の卒業生や在学生などととも日本歴史地理研究会を設立、10 月からは機関誌『歴史地理』を刊行している。京都帝国大学講師となったのは明治 41 年からで、主として国史地理や日本古代史、民族史を講義した⁴⁶⁾。米倉が受講した昭和 4 (1929) 年の喜田の講義科目は国史地理であったが(第 12 表)、これは必修ではなく副科目(選択科目)であった⁴⁷⁾。歴史地理学に興味を持つ米倉は、あえて喜田の講義を選択したということであろう。米倉はこの講義について次のように回顧している。

昭和四年夏休明けのまだ蒸し暑い京大陳列館内の教室であった。喜田講師の国史地理の集中講義に出席する。(略)喜田先生の講義は談論風発で大変面白かったが、さて何を聞いたか今は思い出せない。あまりにも多くのことを短時間に承わった為であろう。⁴⁸⁾

米倉は昭和 48 (1973) 年にも「紫煙をくゆらしながら談論風発の喜田貞吉先生の歴史地理学は面白かった」と特筆しており、よほど喜田の講義が印象に残ったようである。残念ながら喜田の講義内容は不明であるが、米倉の歴史地理学への興味をかき立てたことは間違いないであろう。昭和 9 (1934) 年から同 10 年ごろに日本歴史地理学界に入会し、雑誌『歴史地理』に論文を寄せているのも、喜田の影響の可能性も否定できない。しかしながら米倉は「農村計画としての條里制」で自身の研究方法について、「歴史家が、その史料解釈の補助として、片手間に実地踏査を試みられた従来の歴史地理の研究とは、方法論上、区別せらるべきもの」と述べており⁴⁹⁾、仮にこの歴史家が主として喜田ら日本歴史地理学会の研究者を指しているならば、喜田の影響をあまり過大に評価することはできないであろう。後年、米倉は喜田の歴史地理学について「史家の有力たる史料の一つとして研究するという、歴史の補助学としての歴史地理学」と評価しており⁵⁰⁾、立場や方法論的には一線を画していたようである。とはいえ米倉が歴史地理学への興味を高めていく上で、喜田の存在は少なくなかったと考えられる。

IV. おわりに

本小論においては、米倉が京都帝国大学史学科において、諸教官からどのような影響を受けたかについて、米倉の回顧や実証研究を素材として考察を試みた。

米倉は地理学教室の初代教授で当時理学部に転じていた小川琢治をはじめ、当時地理学教室教授の石橋五郎、助教授の小牧実繁などから大きな影響を受けていた。また、国史学講座に関わる喜田貞吉講師からも国史地理の講義を受け、歴史地理学への興味をかきたてられていたようである。

岡田が指摘するように、確かに米倉は小川の歴史地理学の学風を継承している面が少なくない。すなわち条里制や条里式集落の地理学的研究は小川が緒につけ、それらを中国の土地制度や集落との関連性においてとらえようとしており、この発想を米倉も継承している⁵¹⁾。しかしながら理論や方法論の面に関しては、むしろ小牧の影響を重視すべきである。昭和8年における小牧の「時の断面」説を最も早く受け止めたのが米倉であり、博士論文である『東亜の集落』でもこの理論に依拠している。小川や小牧から米倉へと続くこの系譜については、今後具体的研究事例に即した、さらなる検討が必要であろう⁵²⁾。

本小論では小牧が身を置いた文学部史学科の教官からの影響について論じたが、文学部教官以外で大きな影響を与えた教官と言え、農学部教授の古賀正巳があげられる。米倉が地理学教室卒業後、1年間教務嘱託を務めたことは前述のとおりであるが、古賀をはじめとする農学部教官との交流によって、条里制を農村計画として見直すに至ったという経緯を考慮すると、古賀ら農学部教官からの影響も検討する必要がある⁵³⁾。また、国史学や東洋史学、考古学の諸教官などからの影響についても、喜田貞吉を除き取り上げなかった。これらの点についても今後の課題としたい。

【注】

- 1) 米倉二郎「農村計画としての條里制—我国中古の村落とその耕地—」地理論叢 1, 1932, 307-352 頁。
- 2) 米倉二郎「律令時代初期の村落—三十戸一里に就いて—」地理論叢 2, 1933, 198-228 頁。
- 3) 岡田俊裕『日本地理学史論—個人史的研究』古今書院, 2000, 199 頁。
- 4) 前掲 3) 229 頁。
- 5) 京都大学文学部地理学教室編『京都大学文学部地理学教室百年史』ナカニシヤ出版, 2008, 112 頁。
- 6) 前掲 3) 194-269 頁, ②同『地理学史—人物と論争』古今書院, 2002, 63-64 頁。
- 7) 前掲 3) 194 頁。
- 8) 木下 良「米倉二郎先輩を想う」歴史地理学 45-3, 2003, 56-57 頁。
- 9) 米倉二郎「佐賀平野の歴史地理—故郷佐賀と私の地理学—」歴史地理学 40-1, 1998, 41 頁。
- 10) 前掲 5) 8 頁。
- 11) 京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史—部局史編 1』財団法人京都大学後援会, 1997, 39-41 頁。
- 12) 米倉二郎『東亜の集落—日本および中国の集落の歴史地理学的比較研究』古今書院, 1960, 序 2 頁。

-
- 13) (無署名)「昭和五年卒業論文題目」史林 16-3, 1931, 524 頁。
- 14) ①米倉二郎「筑後川下流平野の開発」史林 17-1, 1932, 36-52 頁, 史林 17-2, 1932, 185-201 頁。ただしこの論考は卒業論文そのものではなく, 内容の一部を改編して発表したという。②米倉二郎教授退官記念事業会編『米倉二郎先生年譜・業績・思い出』, 1973, 5 頁。この時に割愛した条里に関する部分については「肥前平野の条里(予報)」と題して昭和 9 年(『地理論叢』5)に発表している。③米倉二郎「すぐ道遥かなり一条里制研究の 50 年一」条里制研究 1, 1985, 2 頁。
- 15) 前掲 9) 41 頁。
- 16) この古賀について, 米倉は「(農林工学教室一筆者注)主任の古賀正巳先生は久留米の方で私の卒論のフィールド筑後川下流平野を知悉されその開発について助言を賜った」と述べている。米倉二郎「歴史と私」歴史手帖 24-2, 1996, 3 頁。
- 17) 前掲 14) ②5-6 頁。
- 18) 金田章裕『条里と村落の歴史地理学研究』大明堂, 1985, 7 頁。
- 19) 前掲 1) 309 頁。
- 20) 前掲 11) 173-174 頁。
- 21) (無署名)「京都帝国大学文学部史学科本学年講義題目」史林 13-3, 1928, 501 頁。
- 22) 前掲 14) ②4 頁。
- 23) 米倉二郎「小川先生と地理学」地理 15-12, 1970, 34 頁。
- 24) 前掲 11) 174 頁。なお, 昭和 4 年度の「日本及東亜の地誌」, 翌 5 年度の「地文学と人文学との関係」の講義内容は不明であるが, 石橋が「人文地理学概説」を講じていたことから, 重複しないよう自然地理学を主とした講義であったと思われる。
- 25) 前掲 5) 京都大学文学部地理学教室編『京都大学文学部地理学教室百年史』ナカニシヤ出版, 2008, 145 頁。
- 26) 小川琢治『人文地理学研究』古今書院, 1928。特に 55-60 頁, 252-255 頁に「垣内式集落」に関する記述が見られる。
- 27) 前掲 14) ③2 頁。
- 28) 内田寛一「そのころの思い出」(京都大学文学部『京都大学文学部五十年史』, 1956), 489 頁。
- 29) 村松繁樹「日本に於ける歴史地理研究史」日本史研究 7, 1948, 251 頁。
- 30) 前掲 6) ②63-64 頁。
- 31) 前掲 5) 62 頁。
- 32) 石橋五郎「教室回顧三十年」地理学談話会会報 3 (石橋博士還暦記念特輯), 1936, 1-2 頁。
- 33) 前掲 21) 501 頁。
- 34) 米倉二郎「輓近地理学界の動向と石橋先生」地理学談話会会報 3 (石橋博士還暦記念特輯), 1936, 43 頁。
- 35) 石橋五郎「我が地理学観一発刊の辞にかへて一」地理論叢 1, 1932, 1-21 頁。
- 36) 前掲 1) 347 頁。
- 37) 前掲 35) 21 頁。
- 38) 前掲 5) 79 頁。
- 39) 前掲 11) 113 頁。
- 40) 小牧実繁『歴史地理学』(岩波講座・地理学)岩波書店, 1933, 58 頁。

-
- 41) 足利健亮「小牧実繁と歴史地理学」(京都大学文学部地理学教室編『地理の思想』地人書房, 1982), 207 頁。
- 42) 小牧は助手の米倉とともに, 昭和 8 (1933) 年から 3 年間, 東照宮三百年祭記念会からの補助を受けて近畿地方農村の歴史地理研究に従事している。財団法人東照宮三百年祭記念会『研究報告 第一号(自大正五年度 至昭和十一年度)』, 1940, 243-246 頁。
- 43) 前掲 2) 198 頁。
- 44) 前掲 2) 200 頁。
- 45) 米倉は小牧の逝去に際して追悼文を記しているが, その中で「先生の歴史地理学の理論は京大の後進に受継がれ人文地理研究の主流となって今日に至っている」と述べている。米倉二郎「小牧実繁先生の人と学問」歴史地理学 149, 1990, 1 頁。
- 46) 川合一郎「喜田貞吉の歴史地理学—未発表の講演録・講義ノートの分析を中心に」人文地理 63-5, 2011, 432 頁。
- 47) (無署名)「京都帝国大学文学部史学科本学年講義題目」史林 14-3, 1929, 457 頁。
- 48) 米倉二郎「喜田貞吉先生の人と学問」歴史地理学会会報 100, 1978, 10 頁。
- 49) 前掲 1) 309-310 頁。
- 50) 前掲 48) 11 頁。
- 51) 前掲 3) 252 頁。
- 52) 京都帝国大学史学科卒で地理学者の藤岡謙二郎や織田武雄は, とともに小牧の歴史地理学の後継者として米倉の名を挙げている。藤岡謙二郎『回想と自己批判』大明堂, 1978, 8 頁, 竹内啓一・正井泰夫編『地理学を学ぶ』古今書院, 1986, 69 頁。
- 53) 前掲 14) ③2 頁。